

その他

コロナ禍でのウィーン留学

坂本尚志*

京都薬科大学 一般教育分野

2021年9月から2022年8月までウィーン大学に留学した。新型コロナウイルス感染症の世界的流行に対するオーストリア社会の対応をつぶさに観察し、2022年2月に始まったロシアのウクライナ侵攻によって国際情勢の変化を体感した1年余りであった。その間、新たな科研費プロジェクトの開始や翻訳の進展、著書の出版等、多くの有益な成果をあげることができた。

キーワード：ウィーン、コロナ禍、ミシェル・フーコー、バカロレア

受付日：2023年2月10日、受理日2023年4月6日

はじめに

2021年9月から2022年8月までの一年間、京都薬科大学の教育職員を対象とした留学制度を利用してウィーン大学教育学部に訪問研究者として滞在した。新型コロナウイルス感染症の拡大が取まらないばかりか、ロシアによるウクライナ侵攻も勃発するという、決して平穏な滞在期間ではなかったものの、研究のみならず教育においても非常に有意義な成果を得ることができた。本稿では、留学の経緯やウィーンでの生活について記した上で、これらの成果について略述したい。

まず、20世紀フランス思想史を専門とする著者がウィーンに滞在することになった経緯を説明しておかねばならないだろう。そもそものきっかけは、ドイツ語圏の教育の研究者である

妻が、勤務先から1年間のサバティカル休暇を取得できるという状況にあった。当初は2021年度を休暇に充てる予定だったが、新型コロナウイルス感染症の影響で半年遅らせての休暇取得となった。妻はウィーンに留学歴があり、知人も多く、子ども2人も含めて家族での生活の立ち上げが他の国や都市と比べても容易であると考えられることから、夫婦ともどもウィーン大学の研究者に受入を快諾していただき渡航準備を始めた。

渡航に際しては、当然ながらビザと滞在許可の取得が必要だった。しかし、在日本オーストリア大使館は、コロナ禍のために大幅に業務を縮小しており、申請のための面会予約を取るのも一苦勞であった。電話はつながらずメールも返信が遅かった。7月初めに必要書類をそろえて家族で出向いたものの、書類の不備等で後日再申請となり、その後一週間ほど膨大な書類をすべて印刷して大使館に送ることとなった。ビザを受けとったのは出発3日前の早朝で、いよいよ渡航を延期すべきかと相談していた時だった。

*連絡先：
〒607-8414 京都府京都市山科区御陵中内町5
京都薬科大学 一般教育分野

子どもの学校選び等の都合もあり、8月中旬にウィーンに出発した。成田空港はまるでゴーストタウンのようで、機内の乗客もまばらだった。ウィーン国際空港に到着すると、当時オーストリアの感染者数が落ちていたこともあり、人出も多く、マスクを屋外では外している人がほとんどで、別世界に来たように感じた。

日本から契約を済ませていた住居はウィーン中心の昔ながらの建物の2階と3階のメゾネット、狭くはあったが到着当初は快適に思えた。とはいえ、ここでは詳しく書かないものの、さまざまな事情によってウィーン滞在中に4軒のアパートに住むことになった。

到着後10日ほどで子どもたちの幼稚園、小学校も決まり、生活に関わる諸事も徐々に解決していき、ウィーンでの1年が始まることとなった。とはいえ、行政関連の手続き等は、ドイツ語と英語が堪能な妻がすべて行い、私は食事の準備などを担当していた。日本での役割分担とは逆転した状態での一年間だった。

オーストリアとウィーン

オーストリアという国について簡単にまとめておこう。中欧に位置するオーストリアは、かつてハプスブルク家が統治する帝国として栄華を極めたが、サラエボでの皇太子暗殺を機に始まった第一次世界大戦後にその領土の大半を失い、1938年にはナチスドイツによって併合されている。第二次大戦後1955年には独立を回復し、中立政策を掲げて冷戦の時代を巧みに乗り越えていった。1995年にはヨーロッパ連合(EU)に加盟した。

スイス、リヒテンシュタイン、ドイツ、チェコ、スロバキア、ハンガリー、スロベニア、イタリアという8カ国と国境を接した内陸国であり、国土の多くをオーストリアにその東端が位

置しているアルプス山脈が占めているものの、ドナウ川流域に肥沃な土地が広がる農業国でもある。面積は北海道とほぼ同じ約8.4万平方キロメートル、人口はおよそ900万人であり、首都ウィーンには200万人ほどが居住している。

公用語はドイツ語であるが、主に東欧をルーツに持つ人々も多く居住しており、旧帝国の公用語であったハンガリー語やスラブ系諸語が至るところで聞こえてくる。国際原子力機関(IAEA)をはじめとする国際機関も多く、英語はどこでも通じる。フランス語話者も少数ながらも存在しており、私はかかりつけ医とはフランス語で話していた。

コロナ禍のウィーン

ウィーンでの滞在を通じて、新型コロナウイルス感染症の脅威は常に感じていた。到着直後こそ感染状況が小康状態を保っていたものの、秋口にかけて徐々に感染者数が増えていった。ワクチン接種は日本に先駆けて開始されていたものの、公衆衛生の名のもとにワクチン接種が事実上強制されることへの反発や、新たなワクチンへの不安など、様々な理由でワクチンに対する忌避感も強かった。

頭打ちの接種率を上げ、感染拡大を防止するために、政府は2021年11月15日よりワクチン未接種者に対する行動制限を課したが、感染拡大の傾向は止まらず、11月22日より全土で4回目のロックダウンが実施されることになった¹⁾。スーパーマーケット、薬局などの生活必需品を扱う小売店を除き、飲食店、商店、文化施設等が閉鎖されることになった。ただし、飲食店のテイクアウトや小売店の電話やインターネット注文で店頭での受け取りなどは許可されていた。企業にも可能な限りテレワークが推奨された。

とはいえ、幼稚園や学校は普段通り授業を継続しており、通勤時間の公共交通機関もそれほど閑散としている様子はなかった。4回目ということもあり、「ロックダウン慣れ」があったということかもしれない。それでもやはり、ほとんどの商店のシャッターが閉まった通りは人通りもまばらで、日本でも感じたことのなかった「非常事態」の雰囲気が漂っていた。

ロックダウンの最中に限らず、何度も聞いた言葉に「3G」がある。これは *geimpft*（ワクチン接種済）、*genesen*（回復済）、*getestet*（検査済）というドイツ語の3つの過去分詞の頭文字を取ったもので、病院や飲食店、コンサートなどの催しに入る際には、接種証明、回復証明、陰性証明のどれか一つを身分証明書とともに提示しなければならなかった。公共の場では FFP2 マスク（N95 規格に相当）を着用せねばならず、感染拡大を防ぐための様々な工夫が実施されていた。

PCR 検査についても、ウィーン市では検査キットが無料配布されており、ウェブサイトから個人情報を登録した上で検体をビデオカメラの前で採取し、それを所定の容器に封入してスーパーマーケットやドラッグストアにある回収箱に午前9時までに入れると、その日の夕方か夜には結果がメールで送られてくるというシステムがあった（写真1 本稿のすべての写真は筆者による撮影）。メールのリンクから EU 基準の QR コードが付いた陰性証明書がダウンロードでき、それを 3G ルールが適用される場所では提示しなければならなかった。もし陽性になった場合は、ウィーン市の担当部署より連絡があり、外出禁止期間等の指示がなされることになっていた。小学生の場合は学校で抗原検査と PCR 検査が定期的実施されており、「ニンジャ・パス」と呼ばれる証明書に、検査済みのシールを貼り付けることになっていた。2021 年秋の段階ではまだ子どもへのワクチン接種が

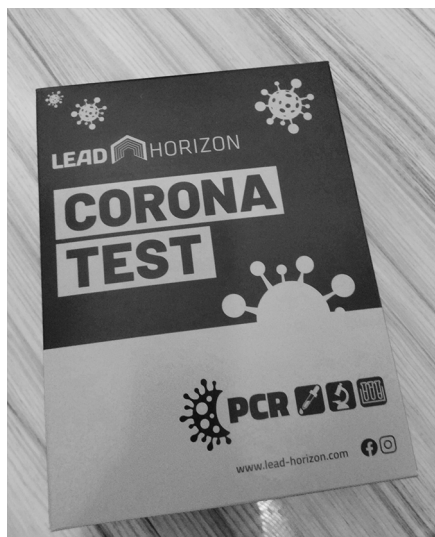


写真1 PCR 検査キット

開始されていなかったが、定期的な検査は感染拡大を防ぐ方策としては有効ではないかと思われた。

ワクチン接種についても、予約なしで受けられる会場がいくつかあった。その中には世界遺産でもあるシュテファン大聖堂に設けられた会場もあった。ウィーンの中心にあり、当然ながら交通の便もよかったので、ここで3回目の接種を受けることにした（写真2）。その場で問診票を書き、本人確認を済ませてから接種を受けた。検温などもなく、経過観察なども特に何も言われず、注射が済めばすぐに帰ることができた。接種の可否も接種後の行動も自分の判断で決めればよい、ということではないかと思われるが、副反応への対処などは果たして大丈夫なのだろうか、とも思った。しかし、思い立った時にワクチンを打てるという敷居の低さは、感染拡大防止にも効果的であるように感じた。

では、オーストリアの新型コロナウイルス感染症への対策は奏功したのだろうか。日本経済新聞のウェブサイトによれば、2023年1月29日現在の人口10万人あたりの感染者数では、



写真2 シュテファン大聖堂のワクチン接種会場

オーストリアは 64,093 人と世界でもっとも多い²⁾。日本が 26,209 人であるため、日本の約 2.45 倍の感染者が出ているという計算になる。死者数は、ジョンズ・ホプキンス大学の統計によると、100 万人あたりでオーストリアが 241.55 人、日本が 54.79 人であり、オーストリアは日本の 4.41 倍となる³⁾。ロックダウン、マスク着用義務、無料の PCR 検査、予約不要のワクチン接種など、感染拡大を防ぐための措置が非常にシステムティックに取られていたにもかかわらず、オーストリアは大きな犠牲を出すこととなった。その原因としては、新型コロナウイルス感染症の病態がいまだ不明であり、ワクチン接種等の感染拡大防止対策が出揃う以前に、感染者数や死者数が増加していたことが大きい⁴⁾。実際、21,000 人あまりの死者のほぼ半数が、2020 年 10 月末からの 7 か月間に集中している (2020 年 10 月 1 日の死者数は 912 人、翌年 5 月 30 日の死者数は 12,796 人と急激に増加している)⁵⁾。私たちが到着した 2021 年 8 月時点で機能しているように見えた感染拡大予防策が、多くの失敗のもとに構築されたものであることは明らか

であろう。さらに言えば、8 カ国と国境を接し、陸路での往来が容易なオーストリアにとっては、自国のみで感染対策を行うことの困難さがあることは想像に難くない。とりわけ、2022 年 2 月 24 日に始まったロシアのウクライナ侵攻は、オーストリアとウクライナの地理的な近さと歴史的な因縁を強く感じさせる出来事であった。

ロシアのウクライナ侵攻

ウィーンからウクライナ国境まではスロバキアとハンガリーを挟んでいるとはいえ、わずか 400 キロメートルである。かつてはハプスブルク帝国の版図でもあり、多くのウクライナ系住民が暮らすオーストリアの人々にとって、ロシアの侵攻が引き起こした悲劇は決して他人事ではなかった。

ウィーン中央駅には連日ウクライナからの避難者が到着し、そのままオーストリアに避難場所を求めるか、あるいはドイツなどの第三国へと出国していった。私の近所の商店でもウクライナ向け支援物資が集められていた。ウィーンフィルのニューイヤーコンサートで知られる楽友協会では、ウクライナ支援のコンサートが行われ、街の至るところにウクライナ国旗が翻った (写真 3)。

子どもたちの学校にもウクライナからの転校生がやってきた。後述するウィーン大学のドイツ語クラスにもウクライナ人の女性がいた。ウィーンに留学中の娘を頼って避難してきたが、夫はウクライナに残っている、ということだった。春頃にはウクライナナンバーの自動車もウィーンのあちこちで見えるようになった。目と鼻の先での戦争が姿をさまざまに変えつつ日常生活に忍び込んでいるようであった。コロナ禍に対する関心も、ウクライナの現状に対する



写真3 ウィーン市庁舎

懸念に取って代わられることとなった。4月には無料のPCR検査が月5回までと制限され、5月半ばには公共交通機関等を除き、屋内でのマスク着用義務がなくなった。戦争という非日常の陰で、日常へ戻ろうとする動きも力を増していた。

ウィーン滞在中の研究

このような社会の状況を観察するかたわら、私は研究を少しずつ進めていた。

私が専門とする研究分野は20世紀フランス思想史と哲学教育である。前者の出発点は20世紀フランスの哲学者ミシェル・フーコー(1926-1984)についての研究であり、京都大学文学部での卒業論文から、2011年にボルドー第三大学に提出した博士論文『ミシェル・フーコーにおける歴史の問題』まで、フーコーの思想の生成と変容の問題を一貫して扱ってきた⁶⁾。その後、1960年代後半に刊行されていた雑誌『分析手帖』における「概念の哲学」と呼ばれ

るフランス思想の一潮流の展開などを扱うようになり、徐々に研究対象が広がった。

後者の哲学教育については、2011年秋に勤務し始めた京都大学高等教育研究開発推進センター(2022年9月に廃止)で、フランスの高校における哲学教育について研究を始めたのがきっかけである。フランスの哲学教育は、哲学的思考力や独創性を評価するものではなく、意見表明のフォーマットである一種の「思考の型」を育むものである、という発見は、その後さまざまな論文や著書において展開されることになるフランスの哲学教育に関する私の考察の出発点となるとともに、教育学を専門とする研究者たちとの共同研究の端緒ともなった。

ウィーン大学での研究活動

フランス語によって書かれたテキストを主要な対象とし、哲学・思想史と教育学という二つの領域にまたがる私の研究を、ドイツ語圏のオーストリアで進めるというのはこれまでにない挑戦であった。

ウィーン大学では、教育学部のヘニング・シュルス教授に受入研究者になっていただいた。直接の知り合いではなかったが、長年交流のあるドルトムント工科大学のローター・ヴィガー名誉教授に紹介していただき、快く受け入れていただいた。ただ、コロナ禍のせいもあり、ようやくお会いすることができたのは11月に入ってからであった。11月中旬にはデンマークの研究者をスピーカーに迎えた宗教教育についてのワークショップがあり、私も参加した。事前課題もあり、当日はディスカッションと発表も英語でなんとかこなし、久々に大学院生に戻ったような気がした。その後も同様のワークショップが開催される予定だったが、ロックダウンが始まり、その後クリスマス休暇に入り、そうし

た機会も途絶えてしまったのが残念であった。

しかし、6月には大学院生向けのセミナーでフランスの哲学教育について話す機会をいただいた。フランスの哲学教育に対するドイツ語圏の研究者や大学院生の見方は、当然ながら日本での受け止められ方ともまったく異なり、非常に刺激的な議論ができた。オーストリアの大学で、日本人がフランスの哲学教育について英語で話すのは奇妙な体験ではあったが、グローバル化が進む高等教育の世界では当然起こりうることなのかもしれない。

科研費プロジェクト

今回の滞在中には、新たに科研費を申請し、2022年2月に採択の通知を受け取った。「最初のフーコー」の総合的研究—フランス国立図書館所蔵の未公刊資料に基づく考察」と題されたこの研究は、若手・中堅の研究者4名とともに、フランスの哲学者ミシェル・フーコーの1950～60年代の草稿を分析することを目指している⁷⁾。フーコーの遺稿は現在フランス国立図書館に所蔵されており、徐々に出版が進んでいるものの、その全容はいまだに明らかではない。この研究では、5名の研究者のグループによって、フーコーの思想形成の初期段階を、これまで参照されてこなかった資料を駆使しつつ解明することを目標としている。定期的なミーティングや読書会の開催、あるいは一般向けの研究会の開催などをオンラインで実施してきた。

2022年6月には、このプロジェクトの一環としてフランス国立図書館手稿部門にて3日間調査を行った(写真4)。フーコーの書き文字は非常に癖が強く読みにくいいため、多くを解説することはできなかったものの、アーカイブの実態を把握し、いくつかの未公刊資料について



写真4 フランス国立図書館手稿部(入口)

内容を確認できたことは大きな成果であった。なお、フーコーの草稿の一部については、ウェブサイトでも閲覧できるものの、「オンラインでは見られないものに重要な資料がある」という、私が尊敬するフーコー研究者であるリール大学教授フィリップ・サボ氏からの助言の正しさを感じた調査でもあった。本来ならばオーストリア滞在中に何度か調査を行いたかったものの、6月下旬から9月まで工事のため手稿部門が一部閉鎖されてしまったため、それはかなわなかった。しかしながら、私自身も含めた研究グループが今後調査を進め、新たな発見ができることを期待している。

翻訳作業と『バカロレアの哲学』出版

朝に子どもたちを送り出した後は、オーストリア国立図書館に行くことが多かった(写真5)。徒歩10分ほどの距離にあり、1年間のパスを30ユーロで購入して閲覧室で作業をしていた。とはいえ、ウィーンに持参できたのは本



写真5 オーストリア国立図書館

数冊にすぎず、帰国の際に再度輸送することを考えると日本で所有している文献を再度購入することもはばかれた。

こうした状況は予想できていたので、なるべく新たな資料を必要としない仕事を準備していた。翻訳である。上述したフィリップ・サボ氏の著書『ミシェル・フーコーの『言葉と物』を読む』を翻訳することは、2004年に本書を読んで以来の宿願であった⁸⁾。難解で知られるフーコーの『言葉と物』の議論が見事に整理され、理解可能な形で提示されている本書の翻訳は、日本のフーコー研究の一層の進歩に不可欠であると考え、長く構想を温めていた。

幸い出版の引き受け先も見つかり、あとは腰を据えて翻訳に取り組む時間だけが必要な状況だった。ウィーン滞在はまさにその好機だった。翻訳するテキストと辞書が最低限そろっていれば作業ができる翻訳は、ドイツ語圏で言葉が通じないストレスを日々感じていた私にとって、日中の数時間フランス語の世界に没頭できる貴重な機会でもあった。引用された数々の参考文献を参照する必要もあり、最終的な作業は帰国後に持ち越しになったものの、大部分の訳稿を完成させることができたのは、非常に大きな成果であった。

しかし、静かに翻訳を進めるだけではウィー

ンの研究生生活は終わらなかった。2021年10月末、ちょうどリールに滞在してサボ氏と4時間にわたり翻訳や教育の話に興じていた日の夕刻、日本から電話があった。バカロレア哲学試験に関する書籍の出版を計画していた日本実業出版社の編集者からだった。2018年夏に、前著『バカロレア幸福論』（星海社）を読んでいたが、新たな書籍の執筆を依頼されていた。1年あまりの間にほぼ原稿が完成し、後はいくつか加筆するだけ、という段階でコロナ禍が始まり、とりわけ大学のオンライン授業の対応に忙殺されていた。2021年初夏には執筆を断続的に再開していたものの、ウィーン渡航の準備で再び中断していた。催促の電話にすぐ送ると答え、ウィーンに戻ってから10日ほどで原稿を完成させ送った。校正はロックダウンの最中からその直後まで続いた。できるだけ読みやすい文章になるよう、音読を繰り返して修正を重ねた。

こうして完成した著書『バカロレアの哲学「思考の型」で自ら考え、書く』の発売は2022年1月28日で、その前後から日本実業出版社や朝日新聞社のウェブサイトで冒頭が公開されたこともあり、売れ行きは好調だった⁹⁾。『週刊読書人』2022年3月18日号ではデカルト研究者の津崎良典氏から書評をいただき、『読売新聞』2022年4月24日の読書欄には住友生命保険特別顧問の佐藤義雄氏の書評が掲載された¹⁰⁾。反響も大きく、本稿執筆時点の2023年2月で3度目の増刷となる4刷が手元に届いたところである。フランスのバカロレア哲学試験に関する研究の成果を、できるだけ正確さを損なわず、しかも一般読者に読みやすい形式、体裁で届けるという当初の目的はかなり達成できたのではないかと考えている。人文学の領域においては、書籍の出版は最先端の研究成果を伝える媒体であると同時に、新たな知をできるかぎり多くの人に届ける場でもある。本書は、日本の哲学教

育やライティング教育に対して、これまでになかった視座から新たな示唆を与えるものになっているのではないかと自負している。

ドイツ語学習

今回のウィーン滞在は、これまで本格的に取り組むことがなかなかできなかったドイツ語を学習する貴重な機会でもあった。ウィーン大学の言語センターのドイツ語講座に2021年秋から申し込むことを考えていたが、ロックダウン等もあり、結局かなわなかった。そのかわりに、日本から持参した文法書やスマートフォンのアプリで独学するとともに、日々上達していく子どもたちからドイツ語を学んでいた。

新型コロナウイルス感染症の感染状況も落ち着いていた3月に入り、ウィーン大学の3カ月のコースに登録した。オンラインでプレースメントテストがあり、筆記試験を受け、その後面接を受けてクラスが決まった。私は下から2番目のレベル（CFERのA1/2）に入ることになったが、独学でも多少進歩していたと見えて安堵したのを覚えている。

3月末から6月中旬まで、週に2回各2時間30分の授業が始まった。教室はかつてのウィーン大学物理学研究所の建物で、シュレーディングーやボルツマンといった面々が研究していたところである。もちろん当時の面影はほとんどなくなっていたが、科学史の史跡とも入れる場所で勉強ができることには非常に感激した。

教室にはアメリカ、エジプト、ウクライナ、サウジアラビア、中国、ペルー、スウェーデン、ブラジル、ロシアなどから来た15人弱の生徒がおり、毎回文法の講義や会話のグループワークなどを熱心に行っていた。毎回授業後には作文や文法、聴解問題、オンラインでのドリルなど多くの宿題が出され、かなりの時間を使わな

ければならなかった。

6月にはテストがあり、文法、作文、聴解、会話の4科目で合否が判定された。最初の3科目は教室で一斉に受験し、最後の会話のテストは生徒2名が同時に呼ばれ、順番に質問に答える形式だった。試験後一週間ほどして結果がメールで送られてきた。無事合格しており、ドイツ語圏に滞在した成果の一つを形にできたような気がした。

ドイツ語教室の3カ月間では、ドイツ語を学んだだけでなく、久々に学ぶ立場になったという経験が大きかった。説明や練習問題がよくわからない、宿題の作文に四苦八苦する、クラスメートとの会話で言葉に詰まるなど、かつてフランス語を学んでいた経験を繰り返すようだった。もちろん、フランス語を学んでいたのは20年以上前のことで、その時とは自分自身の状態が違いすぎるため参考にはならない。とりわけ記憶力が落ちている。しかし、英語とフランス語の知識を援用することで、ドイツ語の文法や語彙を理解し、身につけられることがわかったのは大きな発見であった。それはまた、英語やフランス語をよりよく理解することにもつながるように思われた。

2003年にボルドー第三大学で日本語を教え始めてから20年近くが経過したが、この間言語を教室で学ぶ立場になることはなかった。ドイツ語を学ぶことで、自分自身が教える立場に戻った時に、多少なりとも学ぶ側の視点を踏まえつつ授業ができるのではないかと感じた。帰国後の教育にどれほど反映できているかはわからないが、これまでの自分自身の教育活動を振り返る貴重なきっかけとなったことは間違いない。

なお、ドイツ語は帰国後も細々と続けており、12月にはドイツ語技能検定試験（独検）の3級を受検した。翌月合格の報を受け取ったが、今後も学習を続けていきたいと考えている。研

究に役立つレベルに到達することはないかもしれないが、それでもやはりドイツ語を通して世界を異なる視点から見られることは非常に有益である。

ウィーン滞在の総括

コロナ禍の最中であり、行動には多くの制約があったものの、それでも大きな収穫のあった滞在であった。研究に関しては、科研費採択、翻訳の進行、著書の出版などの成果が得られた。特に著書の出版は、一般の読者にも広く訴えかける内容でもあり、研究成果の社会への還元という意味でも重要であった。これらの成果は、日本での日常とは切り離されたウィーンという環境であったからこそ達成されたものであると言えるだろう。

同時に、ドイツ語圏という自分自身にとっては未知の文化・社会の中で暮らす経験も重要であった。特にドイツ語を学ぶ経験は、自分の教育実践のあり方を相対化しつつ振り返るための格好の機会でもあった。本稿では直接触れなかったが、日常生活や余暇の中で、オーストリア社会の多様な側面に触れることができたことは、今後の研究と教育にとって資するところが大きいと信じている。

とはいえ、やり残したこともなかったとは言えない。今回の滞在では、翻訳や執筆に多くのエネルギーを費やすことができたものの、その反面腰を据えて文献を読む時間がそれほど多く取れなかった。物理的制約であまり書籍を持っていかなかったこともあるが、あまりに濃密なウィーンでの一年それ自体が、解説すべきメツ

セージに満ちあふれていたということかもしれない。

そして、シュルス教授をはじめとするウィーン大学の研究者コミュニティとは、コロナ禍の影響もあり、それほど多くの交流の機会を持てなかったことも残念である。今後ウィーンを再訪する際には、より緊密な関係の中で共同研究を進めていきたい。

今回の留学に際しては、多くの本学関係者のご理解をいただき、出国前から帰国後まで多大な支援をいただいた。京都薬科大学の研究と教育の一層の発展のためにも、留学制度の活用は非常に有効な手段であると、今回のウィーン滞在中を通じて痛感した。

【引用文献】

- 1) <https://www.reuters.com/world/europe/austria-powers-down-public-life-fourth-covid-19-lockdown-begins-2021-11-21/> (閲覧日 2023年2月6日)
- 2) <https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/coronavirus-chart-list/#infectionPer10Mpopulation> (閲覧日 2023年2月6日)
- 3) <https://coronavirus.jhu.edu/data/mortality> (閲覧日 2023年2月6日)
- 4) <https://ourworldindata.org/coronavirus/country/austria> (閲覧日 2023年2月6日)
- 5) <https://www.worldometers.info/coronavirus/country/austria/> (閲覧日 2023年2月6日)
- 6) Takashi Sakamoto, *La probl me de l'histoire chez Michel Foucault*, Lille, ANRT, 2012.
- 7) <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-22K00115/> (閲覧日 2023年2月6日)
- 8) Philippe Sabot. *Lire Les mots et les choses de Michel Foucault*. 2006, PUF, Paris.
- 9) 坂本尚志. パカコレアの哲学「思考の型」で自ら考え、書く。2022, 日本実業出版社, 東京.
- 10) <https://www.yomiuri.co.jp/culture/book/review/20220426-OYT8T50006/> (閲覧日 2023年2月6日)